

大極上々吉巳年 撰主鳥羽村
山吹雌穂種 晩稲也 大西新右衛門
のし 進上
尾崎八郎右衛門様

⑥の翻刻

⑥

N042 花蔵寺町尾崎家文書 5-15

一枚の袋が語ること —江戸時代の稲の種子交換—

近世部会 事務局 内藤 路子

上の写真は、花蔵寺町の尾崎家が所蔵していた古文書です。旗本松平氏（大多喜藩大河内松平氏の分家）の家臣から花蔵寺村の有力百姓尾崎八郎左衛門らに宛てた書状（①～④）と、八郎左衛門から家臣らに宛てた書状の下書き（⑤）で、領主家と領内の有力百姓の関係をうかがうことのできる興味深い内容です。ですが今回注目したいのは、これらが入っていた袋（⑥）です。この袋はもともと書状入れだったのではなく贈答品の袋だったことが、「のし」「進上」という記載からわかります。宛先が書状と違う「尾崎八郎右衛門」であることも、書状とは無関係なことを示しています。ではこの袋には何が入っていたのでしょうか。それについては、右上段の「雌穂種」「晩稲」という記載から、晩稲の品種の種籾だとわかります。品種名は「山吹」です。年代は不明ですが巳年に採種したもので、鳥羽村の大西新右衛門が「撰主」、つまりこの種籾を選んだと記されています。残念ながら種籾は残っていませんが、この袋は、大西新右衛門が尾崎八郎右衛門に種籾を贈るという実際のあったことを示す史料だといえます。

ところで、江戸時代の米は領主に納める税であり、納める米の量は年貢割付状とよばれる文書によって村に通知されました。そこには年貢の内訳が細かく記されていますが、納めるものはただ「米」と書いてあるだけです。しかし年貢として納められていた米は、恐らく単一の品種ではありません。日本最古の農書（農業技術書）といわれる『清良記』巻七（寛永六（一六二九）年から承応三（一六五四）年頃成立）には、早稲・中稲・晩稲の粳稲・糯稲・畑稲・大唐米（赤米）など合計九六もの品種が紹介されていて、土地の条件に適した品種を選んで作付けすること、農作業の繁忙期を分散させるた

めに栽培時期や性質の違う品種を組み合わせる
ことなどの栽培技術が記されています。安定し
た収量を確保するために、江戸時代の水田では、
多様な品種の稲が栽培されていたのです。

大西新右衛門については、史料が乏しいため
詳しいことはわかりませんが、幕末に旗本津田
氏（鳥羽村の領主）の代官をつとめていること
から、鳥羽村の有力百姓だと考えられます。

尾崎家も幕末に幡豆陣屋（旗本松平氏の陣屋
の代官をつとめた家で、農業の分野でも指導的
な立場にありました。元禄五（一六九二）年の
『万覚書日記』（尾崎家文書一六三三）には、手
作り地に作付けした稲の浸種（発芽を促進する
ために種子を水に浸すこと）月日、浸種量、作
付け場所が品種別に記してあり、尾崎家がこの
年、粳米四種、糯米一種を栽培したことがわか
ります。寛政六（一七九四）年の『粳種割合借
シ扣』（尾崎家文書一六三〇）は、どの品種の
種籾を誰にどれだけ貸したかの記録で、経験か
ら得た豊富な知識に基づいて、土地の条件にあっ
た品種の種籾を小作人に貸し与えたと推測され
ます。尾崎家では元禄五年から嘉永五（一八五二）
年までの約一六〇年間に、粳米三二種、糯米九
種、合計四十種を作付けています（『西尾市史
三』）。このように多くの品種の種子をどのよう
に入手したのかよくわかっていませんが、その
方法のひとつをこの袋は教えてくれています。

この例のように「のし」をつけて贈ることは
まれだったと思いますが、稲の種子を他村の人
と交換したり、旅先から持ち帰ったりすること
が、江戸時代から明治期にかけて盛んにおこな

われていました。稲は栽培地を変えると収量が
増えること、逆に連作すると米質が悪くなつて
収量も減ることが知られていたからです。安政
六（一八五九）年に『農稼録』を著した尾張国
海西郡大宝新田（現、海部郡飛島村）の長尾重
喬は著書の中で、旅先から持ち帰った稲の種子
を試作し、良好なものを小作人に配布して栽培
させたこと記しています。では、良い種子とはど
のような種子でしょうか。それが、この袋に記
されている「雌穂種」なのです。

江戸時代の人々は、植物にも男女（雌雄）
の区別があると考えていました。稲の穂も同
様で、良い種子を得るために雌穂から採種す
ることが推奨されました。これを勧めた最初
の農書は『農業全書』（元禄十（一六九七）年）
ですが、この段階では雌雄の違いが曖昧でし
た。これに明確な判別基準を示したのが『農
稼業事』（寛政五（一七九三）年）と『農業余
話』（文政十一（一八二八）年）で、多くの人
に支持されて広く普及しました。また、一枚
の紙に三十余種の作物の雌雄を図示した『草
木撰種録』（文政十一年）は、そのわかりやす
さと手軽さから、何度も版を重ねるベストセ
ラーになりました。こうして、雌穂を選んで
種子を採る「撰種」が広まりました。尾崎家
の当主は八郎左衛門を名乗った時期と八郎右
衛門を名乗った時期がありますが、八郎右衛
門の名が史料で確認できるのは、『農稼業事』
が出版された時期と重なります。大西新右衛
門が尾崎八郎右衛門に「雌穂種」を贈ったのは、
雌雄説による選種が広まり始めたこのような
時期だったのではないかと推測されます。

この袋がたまたま書状を入れる袋として再利

用されていたため、この地域にも作物の雌雄説
による選種が伝わっていたこと、採種した種籾
を他村の人に贈るといったこと、採種したことが明
らかになりました。種籾のやりとりは多くの場
合、人々の日常的な交流の中で、記録には残ら
ない形でおこなわれていたと考えられます。こ
の袋は、それを目に見える形で伝える貴重な史
料だといえます。二人の接点を確認できる史料
は現在のところこの袋だけですが、もしかす
ると、村々の指導者層の間で、農業に関する情報
のネットワークが形成されていたかもしれませ
ん。今後はそうした視点ももって古文書の整理
に取り組みたいと思います。

皆さんのお宅にも、思いがけず昔の人の生活
や仕事ぶりを身近に感じられる古文書があるか
もしれません。古い紙の束などを見つけたら、
ぜひ市史編さん室にお知らせください。

表紙写真史料の翻刻

尾崎八郎左衛門殿 御報 河村三左衛門 木戸傳兵衛	尾崎八郎左衛門様 石川文次郎様 無異貴答 大河内信之丞	尾崎八郎左衛門殿 御報 河村三左衛門	幡豆中村 尾崎八郎左衛門様 御陣屋 無別条 御屋敷 太田衆蔵
①	②	③	④

こちら
古代・中世部会
です。

インターネットで
『資料編2 古代・中世』の
概観が可能に!!

古代・中世部会 編集委員

田島 公

新たに刊行された『新編西尾市史 通史編1 原始・古代・中世』（令和四年十月）をもっと詳しく知りたいという市民の方は、『新編西尾市史 資料編2 古代・中世』（令和二年五月）の利用をお勧めしますが、併せて昨年十二月から本格公開した、東京大学史料編纂所の「編年史料（古代）」編纂支援資源化データベースMIDOH（公開先 URL <https://wwwapp.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/w28/search>）を是非ご利用ください。便利な検索機能によってお手軽に『資料編2』の概要（年月日・網文〔出来事の概要をあらわす文章〕・出典の史料名）の一部が検索できます。

MIDOHは、日本の古代（平安時代以前）の編年史料集（『大日本史料』第一編～第三編や自治体史の編年史料集二九件ほか）の編纂成果を総合し、効率的に利用でき

る環境を提供するもので、学術的・社会的利用を促進し、新規の編纂成果の公開を目的とするデータベースです。東京大学史料編纂所の歴史情報処理システムSHIPSの一つとして運用しており、独立行政法人日本学術振興会の研究費助成事業である二〇一九～二二年度科学研究費補助金（科研費）基盤研究（A）「データ繋留型編纂支援・資源化システム構築と歴史情報データベースの次世代展開」（研究課題番号：19H00533 研究代表者：山口英男教授）によって開発されました。

例えば、「キーワード」の欄に吉良の地名の起源となったという「雲母」（きらら）と入力すると、「和銅六年五月十一日 参河国が雲母を献上する。新編西尾市史・資料編 十七頁」などと出てきます（下図参照）。また、これと併せて『愛知県史 資料編6・7 古代1・2』（一九九九年・二〇〇九年）の年月日・網文・史料名のデータも登録されていますので、「和銅六年五月十一日 三河・大和二か国が雲母を献上した。六頁」などと出てきます。現在は網文だけですが、将来は、本の版面画像や史料の一字検索が出来るようにすることも検討しています。

なお、『新編西尾市史 資料編

編年史料（古代）編纂支援資源化データベース MIDOH

データベース検索 > 編年史料（古代）編纂支援資源化データベース MIDOH > 検索結果一覧

並び順		表示件数					
和暦年月日条：昇順		200					
No	網文和暦年月日	条	網文	区分	編年史料・名称	編	冊
1	和銅6年5月11日		三河・大和二か国が雲母を献上した。	05	愛知県史・資料編		6
2	和銅6年5月11日		参河国が雲母を献上する。	05	新編西尾市史・資...		2
3	和銅6年5月11日	1	陸奥国に白石英・雲母・石硫黄を進上させる。	05	青森県史・資料編...		1
4	応保1年9月28日	1	上皇の近臣右馬頭藤原信隆、左近衛中将藤原成親等を解官す、是日、左近衛府領出雲母里狂、筵三十枚を献す、	01	史料綜覧3	3	903

2 古代・中世』の古代の編纂の根本作業は西尾市から東京大学史料編纂所への受託研究費によって行われ、最新の史料学研究の成果を用いて、より正確に、予算的にも効率よく行われました。これは、「新編西尾市史だより」第二号（二〇一六年）の「こちら古代部会です。」でくわしくご紹介していますので、ぜひご覧ください。

※過去の「新編西尾市史だより」は西尾市史のホームページで公開しています。



こちら

近現代部会で

蒟蒻版と謄写版

—近現代史料と簡易印刷—

近現代部会 編集委員

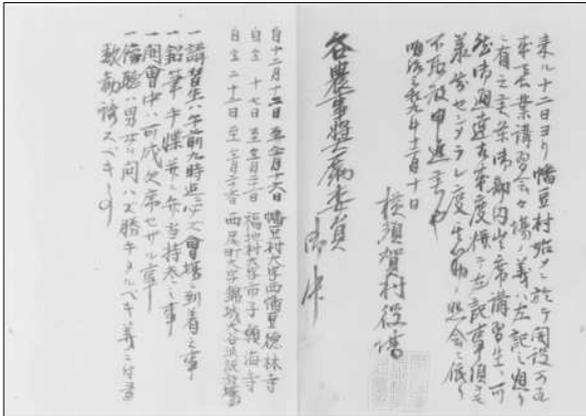
岡田 洋司

『新編西尾市史 資料編5 近現代』は令和六年度に刊行予定です。現在、各委員は掲載される史料の最終的な選定を行っているところです。

半世紀も前のことです。若かった私は、東京のある市で自治体史の編さんをはじめ経験しました。明治時代の行政文書のなかにブルーの字も鮮やかな文書を見つけました。とてもインパクトがありました。先輩が笑いながら「蒟蒻版だよ」と教えてくれました。

蒟蒻版、あるいは蒟蒻版印刷とはなんでしようか。まず紙に特殊な青いアニリン系のインクで文字を書きます。それを、ゼラチンを固めてつくった板のうえにのせます。するとゼラチンがインクを吸収します。このゼラチン板のうえに印刷する紙をのせ、上から擦るとゼラチンのインクがその紙にうつり、印刷ができます。このゼラチン板

を蒟蒻にたとえたようです(本当に蒟蒻を使ったという説もあります)。すぐにゼラチンのインクが薄くなり、大量には印刷できませんが、手書きで写すよりは便利で近現代の史料にはこうした簡易印刷による史料がかなりあります。それは手書きで一部だけを書くのではなく、複数部数の文書が必要となったという時代の要請です(大量の部数が必要な場合は活版印刷が使われました)。左の写真は蒟蒻版による行政文書の一例です。カラーではないのでインパクトはないと思いますが、一九〇六(明治三十九)年十二月の横須賀村の蚕糸業講習会の案内です(KOT1吉



良町 荻原村文書横須賀村役場関連)。

次に現れたのが、あのT・A・エジソンが発明したという謄写版印刷(ガリ版印刷)です。丈夫な雁皮紙にパラフィンをしみこませた原紙を細かいやすり状の「ガリ版」に置きます。そして鉄筆でガリガリと音をたてながら(やや誇張)字や絵を描いていきます。鉄筆で書いた部分だけパラフィンが剥がれ、インクを通すようになります。この原紙を、印刷機の木のコに貼り付け、うえから練インクをローラーで擦りつけます。すると字や絵の部分だけインクが通り印刷ができるというわけです。

この謄写版は、明治後半から普及しはじめ、郡役所や町村役場・学校等の印刷物に使われました。またこの方法で青年団の会報・団報や文学等の同人雑誌がつけられました。それは、謄写版によって専門の文筆家でない人びと、とくに青年たちが自前の表現の発信手段をもつことができるようになったというところであり、地域の文化にとって大きな意味をもちます。下の写真は、戦後のものですが、寺津町青年団の会報『寺津青年』一九五一(昭和二十六)年五月号(Z135近代旧町村役場等資料)の一部です。



電子的な「活字印刷」による資料編では、当然、もとの字・文章の表記手段はわからなくなります。もちろん書かれていた史料の内容を理解するには何の問題もありません。しかし、少なくとも私は蒟蒻版や謄写版による洗練されない、いわば凸凹した表記(字面や古びた紙質のなかにこそ歴史のリアリティを感じます。そこで、私は、今回の資料編では、「口絵」のページ等で蒟蒻版や謄写版の史料を再現したいと思っています。そうすれば最初に私が蒟蒻版を見たときのインパクトを共有していただけるかもしれません。



主な活動記録

(令和4年4月～令和5年1月現在)

● **編さん委員会** 4年5月(書面表決)

● **編集委員会** 4年6月30日(リモート)・
4年12月22日(同)

考古部会

● 『通史編1 原始・古代・中世』の編集・刊行

古代・中世部会

● 『通史編1 原始・古代・中世』の編集・刊行

近世部会

● 『資料編4 近世2』の編集

● 寄託・寄贈文書整理

花岳寺文書(吉良町岡山)・尾崎家文書(花蔵寺町)・瑞松寺文書(寺津町)ほか

金石文調査

妙光寺(寺津町) 渡辺家墓石・養寿寺(下矢田町) 多米家墓石・宝泉寺(吉良町小牧) 梵鐘・縁心寺(中町) 九津見家墓石ほか

調査にご協力いただいた皆さま、情報をお寄せいただいた方々へ心より感謝を申し上げます。

近現代部会

部会

8月10日(リモート)・12月10日(同)

● 『資料編5 近現代』掲載資料検討会

7月7日・9月10日・10月13日・11月6日・
11月19日・12月8日・1月21日・2月16日

● 近代新聞(「新愛知」)調査

のべ36回 名古屋市鶴舞中央図書館

● 資料筆耕ほか

自然部会

● 地質・気象・動物の追加調査

4月～1月 のべ76回

● 『別編2 自然』執筆

美術工芸・建造物部会

● 『別編1 美術工芸・建造物』執筆・編集

撮影

養泉寺(吉良町富田) 阿弥陀如来坐像

民俗部会

部会

6月10日・9月14日・12月14日

● 市内の祭礼・習俗・民具などの調査

4月～1月 のべ247回

● 『別編3 民俗』の執筆

追悼

自然部会のクモ類担当の執筆員としてご尽力をいただいた緒方清人委員が令和4年12月にご逝去なさいました。慎んでご冥福をお祈りいたします。



『新編西尾市史 通史編1 原始・古代・中世』刊行記念講演会

『通史編1 原始・古代・中世』の刊行を記念し、編集委員長の金田章裕委員、古代監修者の田島公委員、中世監修者の山田邦明委員による講演会を行いました。

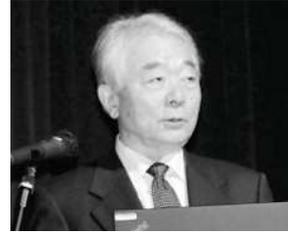
日時 令和4年12月18日(日)
会場 西尾市文化会館小ホール
参加者 150人(事前予約制)



山田委員



田島委員



金田委員長

演題・講師

① 「西尾の地形環境」

金田章裕氏（京都大学名誉教授）

② 「古代播豆郡8郷の謎に挑む」

田島公氏（東京大学史料編纂所教授）

③ 「中世のムラと交通」

山田邦明氏（愛知大学教授）

『新編西尾市史 通史編1
原始・古代・中世』を刊行しました

『新編西尾市史』初めての通史編となる『通史編1 原始・古代・中世』を刊行しました。最新の歴史研究により、旧石器時代から戦国織豊時代にかけての西尾の社会のようすや人々の暮らし、歴史上の事件や謎を明らかにしています。

A5判 フルカラー 841頁
本文収録CD-ROM付(全文検索ができます)
4000円

◆こんなトピックや謎に挑んでいます

- ・ 枯木宮貝塚・八王子貝塚と出土人骨から見た縄文時代人のすがた
- ・ 小島銅鐸を祀った弥生時代人はどこに住んでいたか。
- ・ 三河湾を望む大型古墳とヤマト王権
- ・ 天皇家に贅を奉った三河湾三島の海の民「海部」
- ・ 女帝 持統太上天皇の参河行幸のルートとその理由
- ・ 日本に綿の実を初めて伝えたという天竹神社の棉祖神（天竺人）は実在したか。

* 古代の播豆（幡豆）郡8郷はどこか。

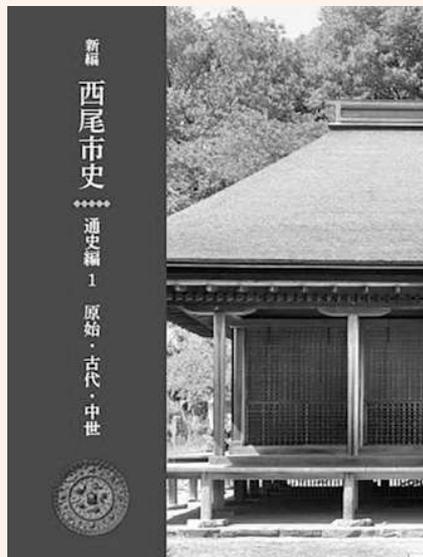
* 足利一門の名族吉良氏の実像

* 吉良氏の居城「西条城」は実在したか。

* 旅人たちが見た中世の西尾の風景

* 中世の城を遺構と城郭の発達史から検証する。

* 資料と遺跡から中世の村々をめぐる。他にも魅力的なエピソードが盛りだくさんです。ぜひご覧ください。



■頒布場所

西尾市岩瀬文庫・西尾市資料館・一色学びの館・尾崎士郎記念館・塩田体験館

■通信頒布をご希望の方

西尾市史編さん室（次頁参照）までメールでお問い合わせください。

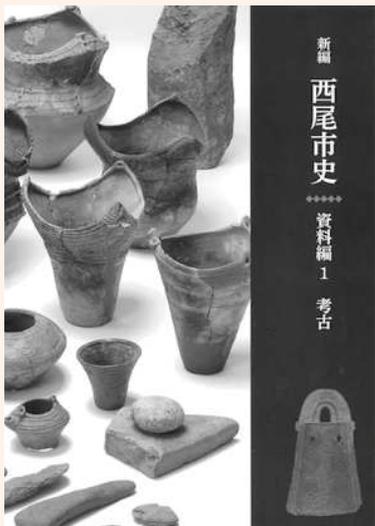


『新編西尾市史』 既刊のご案内

『新編西尾市史』は、平成23年4月の西尾市・一色町・吉良町・幡豆町の合併によって誕生した新しい西尾市の姿を、歴史・文化・自然・美術・民俗などのさまざまな視点から明らかにするものです。通史編・資料編・別編の計14冊の刊行を予定し（令和5年3月時点）、これまでに4冊を刊行しました。

いずれも西尾市岩瀬文庫などで頒布しています。また、通信頒布をご希望の方は、市史編さん室のホームページ（「西尾市史」で検索）からメールでお申し込みください。

『資料編1 考古』
A4判 790頁 オールカラー
西尾市の遺跡位置図付 5000円



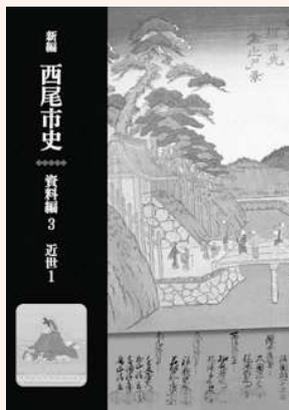
『資料編2 古代・中世』

A5判 760頁 モノクロ カラー口絵付
本文収録CD-ROM付 4000円



『資料編3 近世1』

A5判 790頁 モノクロ カラー口絵付
本文収録CD-ROMと元治元（一八六四）年
「三州幡豆郡吉良庄西尾城之図」複製（B2判）
付 4000円



『通史編1 原始・古代・中世』

新刊
くわしくは7頁をご覧ください。

『新編西尾市史研究』

市史編さんのための調査・研究の成果を、論文・調査報告・資料紹介の形でいち早くご紹介します。各号の内容は市史編さん室のホームページをご覧ください。

第二号〜第八号 500円〜700円

すべてA4判 口絵カラー・本文モノクロ

【お知らせ】令和5年は、都合により『新編西尾市史研究』の発刊をお休みします。

資料や情報をお待ちしています。

西尾市史編さんに役立つような資料（古文書や市内で刊行された古い出版物など）や情報がありましたら、ぜひ市史編さん室へお知らせください。

担当・お問い合わせ

西尾市教育委員会文化財課市史編さん室
〒四四五―〇八四七
西尾市亀沢町四八〇 西尾市岩瀬文庫内
TEL 〇五六三―五六―八七一
FAX 〇五六三―五六―二七八七
E-mail shishi@city.nishio.lg.jp

新編西尾市史だより第九号

令和5年3月3日発行